

# 地域の創意による 新しい教育

# 地域づくり 特集編

## 目次 表紙裏 グラビア

- |       |   |       |  |
|-------|---|-------|--|
| 2~5   | 論文/安彦広育<br>「教育進化のための改革ビジョン」の実現へ                       | 18~19 | 和歌山県/桐井一晃<br>「きのくにICT教育」がめざす子どもの姿                |
| 6~7   | 青森県弘前市/古川真樹<br>高校生が未来を切りひらくサポートを                      | 20~21 | 青翔開智中学校・高等学校(鳥取県鳥取市)/平尾美紀子<br>ディベートでジェンダー平等を考える  |
| 8~9   | 山形県立小国高等学校(山形県小国町)/長岡郁子<br>地域と協働、「挑め、ともに!」            | 22~23 | 山口県/古屋圭宣<br>地域とともにある学校づくり                        |
| 10~11 | つくば市みどりの学園義務教育学校(茨城県つくば市)/三輪俊一<br>先進ICT教育でチェンジメーカーを育成 | 24~25 | 四万十町営塾「じゆうく。」(高知県四万十町)/高橋沙希<br>町内の高校生なら誰でも通える町営塾 |
| 12~13 | 石川県加賀市/上出美知代<br>学校外でのプログラミング教育の充実                     | 26~27 | 長崎県/吉岡英雄、杉野隆之<br>ICTでハンデ乗り越える長崎ならではの教育           |
| 14~15 | 大町市立美麻小中学校(長野県大町市)/前川浩一<br>特産品を生かした多様な学び              | 28~29 | 熊本県熊本市/小田浩之<br>「いつでも どこでも」を重視した教育ICT整備           |
| 16~17 | 兵庫県三田市/佐藤まゆみ<br>「こうみん未来塾」でノーベル賞をめざせ!                  | 30~32 | 論文/佐藤晴雄<br>人づくりと地域づくりの好循環                        |
|       |   | 33    | アンテナショップ紹介                                       |

2022年10月1日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター ©2019 jcrd.jp

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル 13階 電話 03-5202-6131 (代) <https://www.jcrd.jp/> 印刷・製本/株式会社太平印刷社

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



# 地域の創意による新しい教育

新学習指導要領の実施と教育のデジタル化、地域や家庭環境による格差など、わが国の教育はさまざまな課題を抱えている。こうした状況の中、学校内外で地域の創意を生かした教育に取り組んでいる各地の事例を紹介する。



8 青翔開智中学校・高等学校（鳥取県鳥取市）(p20-21)  
ジェンダーに関するディベートの様子



7 和歌山県 (p18-19)  
小学校におけるプログラミング授業の様子



2 山形県立小国高等学校（山形県小国町）(p8-9)  
総合的な探究の時間「白い森未来探究学（もりたん）」で地域の  
民宿を訪ねた1年生たち



1 青森県弘前市 (p6-7)  
フィールドワークでまちを歩く「高校生放課後まちづくりクラブ  
(STEP)」のメンバー



10 四万十町宮塾「じゆうく。」（高知県四万十町）(p24-25)  
四万十町宮塾「じゆうく。」の授業中の光景



9 山口県 (p22-23)  
地域の方々と中学生との協働による  
VR動画の撮影（須佐ホルンフェルスにて）



4 石川県加賀市 (p12-13)  
コンピュータクラブハウス加賀でパソコンを操作する利用者と  
メンターの大学院生



3 つくば市立みどりの学園義務教育学校（茨城県つくば市）  
(p10-11)  
「秋祭り」で学園生が作ったゲームを楽しむ1年生



12 熊本県熊本市 (p28-29)  
タブレットを中心に話し合う2年生



11 長崎県 (p26-27)  
壱岐高校から他の高校へ遠隔授業配信を行ったときの様子。左上  
は壱岐市の博物館、下段中央は島内の古墳から配信するなど、本  
物に触れる授業を展開した



6 兵庫県三田市 (p16-17)  
「こうみん未来塾」で県立北摂三田高校の生徒たちが教える「北  
三科学で楽しませ隊」



5 大田市立美麻小中学校（長野県大田市）(p14-15)  
銀座NAGANOで特産品をプレゼンテーションする生徒たち

# 特産品を生かした多様な学び

## ―地域協働の総合的な学習・美麻市民科―



大田市立美麻小学校地域  
学校協働コーディネーター

・前川 浩一

◆◆◆ コミュニティ・スクールと大人の期待を超える子どもたち

「花豆のPRをさせてください」というプラカードを持った生徒を見つけ、お笑い芸人鉄拳さんと女優村山美樹さんが二人の生徒を増上と呼びました。そこで見事にアドリブで花豆6次産業化の活動を紹介し、その場で花豆あいが100個も売ってしまいました。これは、令和元年信州花フェスタのステーションイベントでの出来事です。

大田市立美麻小中学校は、大田市の旧美麻村地区(令和4年現在人口約860人)にある義務教育学校(小中一貫校)で、コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)を導入し、住民が学校運営に参画する学校です。令和4年現在の生徒数は88人です。美麻スクールパートナーズという地域住民のボランティア組織が子供たちの学びを支えています。

◆◆◆ 任意団体「花MAME株式会社」設立 特産品スイーツを銀座で販売

美麻市民科は、平成22年より地域をフィールドにさまざまな学びを始めた総合的な学習で、現在は7・8・9年生の3年間を継続的探究的に学んでいます。生徒が美麻地域の活性化をテーマに主体的に学びたいことを決め、そこに多くの地域住民が関わっています。これまで、災害、移住、ゆるキャラの制作、地域のお店ネットワークマップの作成、お年寄りからの聞き書き本「美麻の過去と未来」、美麻カルタの制作、そして特産品開発などをテーマに学んできました。

平成25年に初めて特産品をテーマに生徒たちがスイーツづくりに取り組み、花豆ケーキと桑の実を使った大福を考案しました。この授業に関わったボランティアは、このことがきっかけになり菓子工房を起業しました。

さん企画の食事会の時間に美麻地域や花豆についてプレゼン、花豆製品の販売を行い大好評でした。その結果花MAME株式会社はこの年黒字となりました。



花豆甘納豆製法バージョン(左)、花豆パン美麻のミ(中央)、花豆モンブラン(右)



特産品を商品化したソフトクリームと生徒たち

◆3代目生徒の担任 横手健二先生の話  
「地域の皆様に支えられ、私たちはここまでできました。本当にありがとうございます。本当に花MAME株式会社の社長、学年のリーダーが卒業式で述べた言葉です。学校外の35人以上の大人と関わり、数多くの学びから自然と口にした言葉です。「子どもたちが来ることで私たちも元気をもらっている」と地域のパン屋さんが話し

ていました。地域と子どもがつながることで《まごころ》の関係となり笑顔が増えていく。そんなステキな可能性をコミュニティ・スクールから学びました。

◆4代目生徒の担任 平林隆昭先生の話  
「僕はコミュニケーションが一番大事だと思いました」助成金採択団体の最終報告会で、Mくんが語った言葉です。MくんはICTに関する知識に長けています。しかし人とコミュニケーションをとるのが苦手と悩んでいました。美麻市民科では、地域の方から学びそれを地域に戻していく、広げていくことが継続的に行われます。MくんはICTの技術を最大限に活かして調査したことをまとめ、目標であった花豆BOKの目次づくり、紙面構成など中心となって活躍しました。Mくんにとって、美麻市民科はコミュニケーションの大事さを学べた貴重な活動でした。

◆◆◆ 地域と学校協働の学びが生み出すもの  
こうした美麻小中学校での地域協働の学びは、さまざまな子どもが育てたい資質・能力を高めて、美麻でコミュニティ・スクールでの教育目標「個性の生き方や考え方の尊重」や「自律した学習者の育成」などを表現しています。さらにそこに関わる先生方や地域の人たちなど大人たちも共に学びを深め、生き甲斐にもなっています。また商品開発に関わるお店や栽培に取り組み農家の活性化にもつながり、地域におけるまちづくり意識を高めており、移住者にも人気の地域となっています。



総合学習の授業